

『 婦 人 公 論 』

2000年4月7日号から転載



〈政治も家事も夫婦連立で〉

夫は私の「魂の片割れ」

お互いを「主人」「家内」とは呼ばないことにしているんです。
国会議員としての国作りも、個人としての家庭作りも、真のパートナー
として支え合い、認め合うことが何より大切だと思っていますから

畑 はた
恵 けい
(参議院議員)

時間をやりくりして

昨年の五月三日に、船田（編集部注・衆議院議員の船田元氏）と結婚して八カ月が経ちました。

政治家同士の結婚といっても、ごく普通の共働き夫婦とほとんど変わらないのではないだろうか。衆議院と参議院という違いはあっても、仕事の時間帯がほぼ同じなので、すれ違いがないという点では、かえって恵まれているのかなと思います。

平日の朝は、二人とも基本的に「部会」と呼ばれる各省別に行われている政策会合に出席します。部会は朝八時ころには始まりますので、朝食は自民党本部で会議をしながらとることがほとんどですね。予算編成や税制改正のときには、出席したい部会がいくつも同時進行で行なわれますので、その際は夫婦で手分けして出席し、後で情報交換したり、がわりに自分の意見を発言してもらったりと、なかなか便利です。

夜は、お互い会合が重なって、帰宅は十時、十一時を回ることも多いので、基本的に外食ですが、二人揃えば遅くても自宅で夕食をとります。ただ、船田の実家は「作新学院」という学校を経営していますから、夫には政治家としての仕事のほかに、副院長としての仕事もあるんですね。早朝指導のときなど、明け方近くに家を出て校門に立ち、登校してくる生徒たちに、「おはよう」と声をかけたり。今年は二十一年ぶりに野球部の春の選抜甲子園大会出場も決まり、さらに忙しくなりそうです。

私も年明けに、学院長である義母から

学校の皆さんに、作新ファミリーの一員として正式に紹介してもらいましたので、今後は少しずつ、学校のほうでもお役に立てればと思っています。

一週間のうち丸一日、二人の休みが重なることは少ないので、せめて半日は一緒に過ごせるよう努力しています。その時間のなかで、家事も手分けしてやっています。洗濯やゴミ出しなどは平日にもしますが、集中してとなると、やはり週末ですね。

休みの日は、恒例の「掃除タイム」で始まります。これは私たち夫婦のいわばレクリエーションというか、エクササイズです。二人で同時に始めるのですが、進行具合が全然違うんですよ。彼はとにかく一気呵成に掃除するので、ものすごく速い。私がトイレを丹念に磨き上げている間に、他の部屋の掃除を全部すませてしまおうくらい速い。

私は潔癖症なものですから、たとえばガラスのテーブルなど、くもりがなくなるまで何度も乾拭きしないと、気がすまない性格なんです。だから、一人暮らしのときは、陽が傾きかけても掃除が終わらないということがあったのですが、彼と結婚してからは、「こつこつやり方でも、別に困らないんだな」という驚きや発見がたくさんあって、効率的に家事も家事もできるようになりました。

掃除が終わったら、近くのスーパーマーケットに買い物に行きます。翌週のお互いのスケジュールを突きあわせて、どこで夕食がとれるかをチェックし、献立を考えたりして食材を買います。冬場は鍋物とかシチューとか、すぐ作れたり作り置きができるのでよいのですが、夏場

は難しいですね。下ごしらえしたものを、小分けしてラップに包み、解凍して使うようにするなど気をつけても、生野菜はついひからびさせてしまったり……。

週末は、買い込んだ新鮮な食材で少し手の込んだ料理も作って、いつもよりも高めのワインをあげたりと、ちよっぴり贅沢にくつるげよう、心がけています。そんなときの会話は、他愛もないことがほとんどですが、それでも政治は森羅万象、生活全般にわたっていますので、いつのまにか政治の話になっていくことがよくあります。でもそれが結果として、夫婦のコミュニケーションを深めてくれるので、一石二鳥といったところでしょうか。

価値観が驚くほど一緒

彼と私は、「よくもまあ」と感心するくらい性格が違うんですね。だからこそ補い合えるというか、性格が似ていたら、相手のいいところにも気がつかなくなったり、同じことで悩んでしまったりするでしょう。

たとえば船田は気分転換が非常に上手です。私のように煮詰まったり、悩んで考え込んだりなど滅多にしません。ただ、私がかときどき経験する、気が渦巻くようなひらめきとは、あまり縁が無い。コソコソタイプの夫と、スプリングタイプの妻で、まあバランスが取れているのかなと。

性格も違うし、育った環境も異なっているのに、絵画や映画、好きな音楽まで、好みは非常に似ていますね。要するに、価値観が驚くほど似ているんです。何を正しいと思うか、何が我慢ならないかとい

う正義感のような部分が共通しているの

で、腹を立てるときも一緒ですし。ある雑誌のインタビューで、彼のことを「自分の魂の片割れ」と表現したのですが、それ以外どう表現していいのかわからないくらい、生き方の根幹の部分が同じなんです。

出会ったころは、彼が自分と同じ根っこを持っている人だとは想像もできませんでした。当時は政局が波瀾万丈のときで、私たちの所属していた新進党内部もかなり揺らいでいました。党の方針もいつの間にか密室で決められたり。一八〇度転換していたり……。

当選したばかりの私は、あまりの筋の通らなさや不透明さにずいぶんと反発したのですが、ほとんどの人は疑問を感じながらも、沈黙を守っていたように思います。でも船田は、党の幹部会で、「それは間違っています」と何度も発言して、役職を解かれたりしました。

どんな組織においても、自分のからだを張って、大勢にも申すという人は少ないですよ。そういう意味で、こういう人こそ、今の政治の場でリーダーシップを発揮してほしいと心から願っています。

政治の世界では、しきたりや慣習があまりにも幅を利かせていて、その人の能力よりも、派閥とか年功でほとんどの人事が決まっています。情報化やグローバル化の進展で急速に社会が変化している中で、国民の代表である国会議員が、完全に時代遅れの「永田町の常識」に縛られていては、国際協調にも国際競争にも乗り遅れてしまうことは目に見えています。



はたけい 1962年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、NHKに入局。86年、24歳で「夜7時のニュース」の最年少キャスターに抜擢される。89年にNHKを退局してフリーランスとなり、民放の報道番組でメインキャスターを務めたのち、EC（現EJ）の招聘を機にバリエ留学。95年、参議院選に立候補。初当選。現在は自民党所属。

そんな中、船田は二十年のキャリアを持つ政治家でありながら、永田町の常識に染まらず、「世間の常識」で物事を判断できるので、あるべき日本のビジョンといった考えが私とほとんど同じなんです。国会という共通の場で、ともに理想とする社会の実現に向けて二人で力を合わせて仕事ができるなんて、本当に恵まれているといつも感謝しています。

「妻」も「仕事」も自然体で

結婚して、嫁という立場にもなりませんでした。結婚以前は、正直言って不安がないわけではなかったのですが、結婚してむしろ得るところ、特に、義母から学ぶべきところがとても多かったです。

義母は作新学院の学院長をしているのですが、もう十年も車椅子での生活を強いられています。からだが思う通りに動かないにもかかわらず、気遣いは人一倍行き届いていて、私にも、地元の宇都宮の寒さを気遣って、毛皮の襟巻きと手袋

のセットをプレゼントしてくれました。彼女自身もそうだからでしょうか、女性が職業を持つことにも理解があつて、いつも応援してくれています。

彼女はがんばり屋な半面、実に天真爛漫な人で、一万人の学生・生徒を預かる学校経営の責任者という立場にありながら、肩に力を入れて仕事をするとこがまったくありません。苦勞をスタッフに感じさせることなく、いつも心の底から楽しそうに働いている義母を見ていると、私もこんなふうに仕事ができたらいいなと思います。

彼の後援会の方々とおつきあひも、日を追って増えています。皆さん最初は、「船田議員の奥さん」として接するべきか、「参議院議員の畑さん」として接するべきか、ちょっと戸惑っていたようです。政治家の妻というと、結婚したら家庭に入って、後援会の仕事をなさる方が多いからでしょう。私も周囲に気を遣わせてしまって「申し訳ないな」と思

ったのですが、一度、「妻であり、国会議員である」という形でつき合いたせば、次第にそういう認識が定着して、專業主婦の方とはまた違った、後援会への貢献の形があることに気づいてくださるんです。ですから、「ああ、こういう例もあるのか」と思っていたのが大事なのかなど。

それから私は船田のことを「夫」とは呼びませんが、決して「主人」とは言いません。彼も私のことを「家内」とは言いません。ご年配の方の中には違和感を持つ方もいらつしやるかもしれませんが、それもまた一つの例として認めていただけたらいいなと思っています。今年も衆議院の選挙がありますから、船田もその洗礼を受けます。私も妻として、また同じ自民党の議員として、精一杯応援するつもりですが、そのときも「自然体で」と考えています。というのも、先日ちょっと無理をして、体調を崩してしまいました。

結婚後、後援会のいろいろな会合にようんでいただく機会が、どんどん増えまして。大変ありがたかったし、いままでも迷惑をおかけしたぶん、恩返しという気持ちもあつて、日常的にはきついかなど思いながらも出席していたら、年末から年始にかけて寝込んでしまったのです。後援会の方にはもちろん、夫にもすつかり迷惑をかけてしまつて……。

そのとき、高熱にうなされながら、反省したんです。結局、自分に与えられた能力や体力を超えて無理をしても、必ずそのツケが回ってきてしまう。やはり背伸びをせずに、自分らしくやらせていただくのが一番なんだな、と。夫も「きみ

が元気じゃないとほくも元気が出ないんだ」と言ってくれますので、とにかくいつでもハツラツとしていられるように肩の力を抜いてがんばろうと思つていきます。

子どものことに関しては、年齢的には高齢出産になりますので、焦る気持ちがないわけではないのですが、授かりものですから、天にお任せするしかありません。子どもができたらしのように仕事を続けていくか、という問題もありますが、流れに任せて、何事もなるようになるだろうと。

振り返ってみると、ニュースキャスターになつたこと、国会議員になつたこと、船田との結婚など、私の人生は思いがけないことの連続なんです。ですから、先のことを思い煩つてもしょうがないというか、その都度ベストを尽くしていくしかないし、それでいいんだと思つていきます。一人のときは、「心配しても仕方がない」と自分に言い聞かせても不安でたまらなかつたのですが、いまは船田というパートナーがいて、彼がまた「この人、事態の深刻さがわかつているのかしら」と思うくらい何事にも動じない人ですから、一緒に暮らすようになって、心がとても穏やかになりました。

仕事に関しては、「少しでも世の中の役に立てたら」という素朴な気持ちで入つた政治の世界ですから、毎日の暮らしの中で生まれる疑問をおろそかにせず、いろいろな人とのネットワークを大切に、生活感のある政治、血の通つた政治、をこれからも目指したいと思つています。

構成 村田和木 撮影 川上尚見